

夜、ベッドに入った後、その日あった出来事を後悔して、「ああ〜っ！なんであの時あんなことしちゃったんだろう〜！」って叫びたくなること、ありません？

『起きた事実は消せないから忘れた方が良い』

なーんて、自己啓発本とかネットにはよく書いてあるけど、そんなことが簡単に出来たら誰も苦労しないって。

でも皆さん、私からのアドバイス。今日からは安心して眠って下さい。

ここに、もつと大失敗をやらかした人間がいます。もしも恥ずかしくなったら、こいつよりはマシかなって思っていただけたら幸いです。

っていうか、思ってください。じゃないと、私、もう救いようがないんで。

＊

「―――以上で、今月の月次決算の報告は…っ、終了です」

「ああ、お疲れ様」

ノートパソコンの画面の中で、黒瀬（くろせ）課長が、スクエア型の黒縁眼鏡をクイッと上げた。社会人らしく着こなすスーツとワイシャツには、今日もしわ1つ見当たらない。毎

朝自分でアイロンがける習慣があるらしい。

彼の背景には、見慣れた経理課の白い壁とブラインドが映っていた。

「課長は今日も出社なんですね。お一人ですか？」

「ああ。午前中に島波が出社してきたが、今は一人だ」

世界でパンデミックが起きた時、ほとんどの課が在宅勤務になったことは記憶に新しい。結希（ゆき）が所属している経理課も、毎月半分位がリモートワークになった。

そんな中、真面目を絵に描いたような黒瀬課長だけは毎日出社を続けている。一方、私はというと、リモート会議のカメラに映る上半身は白シャツ、オフィス用メイクで格好つけてるけど、下半身はパンツだ。パンツと…その他諸々。

「家の方が楽じゃないですか？」

「いや、家は会社から近いから大差ない」

そう言っつて、いつものネイビーの縦縞が入ったマグカップでブラックコーヒーをすすっていた。十歳年上の大人の余裕が画面越しからでも伝わってくる。

私もノートパソコンの横に置いてある猫柄のマグカップを手に取り、カフェラテを一口飲んだ。パソコンの後ろでは、丸くなっている愛猫のニヤムが大あくびをかいている。

「他に何か、報告事項はあるか？」

リモート会議を終える前の、課長のいつもの口癖だ。

『あります。課長のことが好きです』

いつもここでそう言いたくなる。実行したことは一度もないけど。

「いえ、ありません」

「そうか、じゃあこれで――」

ナー。ー。

ニャムが突然立ち上がり、お尻を突き出して大きな伸びをした。後ろ足がノートパソコンにぶつかり、ディスプレイがお辞儀をするように傾いていく。

「あっ!」

ひと足遅かった。パソコンに手を伸ばしたけど、ディスプレイについたカメラは既に私の下半身を映し出していた。

課長の顔を見る余裕なんてなかった。私の視線は、画面右上にあるインカメラの映像に釘付けだった。

「わああああっ!」

目にも止まらぬ速さでノートパソコンを閉じた。私の声に驚いたニヤムがしつぽを立ててすたこら逃げていく。百メートル走を全力で駆け抜けた後のように、心拍数はバクバクと上がっていった。

バッチリ映ってた。私のパンツと、足と……。

……終わった。

＊

「あー。仕事行ぎだぐない……」

入社してから5年間ほとんど毎日言ってるけど、今日ほど実感したことはない。

金曜のリモート会議から週末が明け、出社日の月曜になってしまった。土日はほとんどベッドの中でうめき声を上げ、泥のように過ごした。いっそのまま仕事を辞めようかとも思った。でも結局、ずる休みをする勇氣のない私は、のろのろと自分の家を後にした。

「柏木。話があるから、少し残りなさい」

「はい…」

1日中俯き、課長と目を合わせずに何とかやり過ごしてきたけど、とうとう終業時間に捕まってしまった。定時で帰る社員たちが、横目で哀れむ視線を送って帰っていく。

社内は、あつという間に誰もいなくなつた。私と黒瀬課長を残して。

「この間のリモート会議の件なんだが」

きた。課長のデスクの前で、気をつけの姿勢で顔だけ俯き、次の言葉を待つ。またあの百メートル疾走後みたいな苦しい鼓動が戻ってきた。

フラッシュバックするインカメラの映像。

あの時映つたのは、振動するパイプを根元まで飲み込んでいる私のおまんこ。あれは、課長の目にどう映つたんだろう…。

「あの…すみませんでした…」

「いつからなんだ」

「え？」

「いつから、画面外でああいう事をするようになったんだ」

「えっと…リモートワークが始まって、たぶん、半年くらい経ってから、です」

課長は腕を組み、冷淡な表情のまま私を凝視した。

「『下半身は画面に映らないから、リモート会議中はパンツが1番ラク』、みたいな記事をネットで見まして。それで、下着でリモートワークするようになって…。それから…」

「それから？」

これを言ってもいいのかな…。

…いや。どうせもうクビだよね。

「……私が新入社員の頃は『黒瀬先輩』として距離も近かったのに、課長に昇進してからはデスクも離れて…距離を感じてしまつて…」

「待て、柏木。なんの話をしているんだ」

「…寂しかったんです」

もじもじと内ももを擦り合わせた。

「課長が遠くて、寂しくて寂しくて、もっと課長を…感じていたくて。それで、会議中に課長の顔を見ながら…少しずつ触るように…」

「……………」

終わった。課長にとって気持ちの悪い部下の完成。明日にでも荷物をまとめなくちゃ。うん、いっそ今、「退職します」って言った方が課長の負担が減るかも。

「あの、私、退——」

「…具体的に、画面外でどんなことをしていたんだ」

「え？課長…」

「答えなさい」

課長、怒ってるの？それとも……。

「あの…。さ、最初は、クロッチ部分を指でなぞったり…」

「他には？」

「それからだんだん、ゆ、指を…入れたり…」

「指はこういう風に動かしていたんだ」

「こういう風になって…。中指を奥まで入れて…指先をクイクイ動かしたり……」

話しているだけで感触を思い出す。子宮の奥がくすぐったい、あの感じ。

「聞いただけでは分かりづらいな。実際にやってみなさい」

「えっ、でも課長…」

「君の勤務態度を改めさせる指導の一環だ」

「ここで、ですか？」

「ああ」

課長の表情も話し方も、仕事と同じく淡々としていた。指導の毛色が変わった気がし

て胸がざわつく。

それってつまり、課長の前でオナニーしろってこと？職場で……？これ、からかわれてるんじゃないよね……？ううん、誰よりも真面目な課長が人からかうなんて見たことない。

頭で理解するより先に、膣壁はしつとりと濡れ始めていた。

「柏木？」

「わかり、ました……っ」

「では、この上に座りなさい」

「ここ、課長のデスク……」

「そうだ」

課長とこうなることを望んでいた私にとって、断る理由はなかった。職場でいちやいやする妄想をしたことも数え切れないくらいある。それが、現実……。

恐る恐るタイトスカートをたくし上げ、ストッキングを脱ぐ。座ったデスクは冷たく、思わず「ひゃっ」と声が漏れた。足を広げ、課長の目と鼻の先に湿り気を帯びた白いショーツを晒した。

「これでっ、良いですか？」

「まだだ」

「…っ」

「柏木は会議に集中せず、触っていたんだろう？」

「っ、はい…」

「足の角度から指の動きまで、正確に再現しなさい」

「…はい」

黒瀬課長の命令口調は何度も聞いてきたはずなのに、今夜はゾクゾクしてしまう。

課長ってやっぱり、私の期待通りSなのかな…。

私は自宅の椅子を思い出しながら、腰を前に突き出し、膝を大きく開いた。ショーツを横にずらす。ぴったりと閉じた溝に、中指を埋めていった。

「ん…っ」

課長、私のおまんこをじっと見てる。いつもの職場で、いつもの課長のデスクに座ってオナニーするの…すごい気持ちいい…っ。

指は自然と奥へ奥へと蛇のように這っていく。ピストンしようと指を引いた瞬間、2人の間にちゅぶ、と卑猥な水音が鳴った。

「っ！あの、今の音はその…っ」

「指を抜いて見せなさい」

「はい…」

言われるがまま、おまんこの体温が移った指を引き抜くと、手首を掴まれた。

「これはなんだ」

「……………」

暗いオフィスの中、パソコンの光に照らされ、てらてらと光る指。あまりにいやらしくて、目を背けたくなる。愛液がべつとりとまとわりついたその指を、課長の唇が咥え込んだ。

「か、課長…っ！」

ちゅぱちゅぱと吸い、熱い舌で愛液を絡め取っていく。甘い果実の汁をすすするように、水かき、指の関節の溝まで丁寧に舐められていく。課長の巧みな指フェラチオを目の当たりにし、私の頬はカッと赤くなった。

舌、気持ちよくて…んっ、舐められてるのは指なのに、全身がムズムズする…。

じゅるる、と低い音を鳴らし、ようやく指が解放された。自身の愛液でてらてらしていた指は、今度は唾液で妖しく光っていた。

「指にまとわりつく位、こんなに濡らして。君は反省する気があるのか」

「すみません…」

表面上はお説教をされているはずなのに。2人の間を流れる性の匂いがどんどん色濃くなっていく。

乳首、勃起てきちやった…。ワイシャツもブラジャーもみんな剥ぎ取って今すぐ課長に抱きつきたい。それにもっと、エッチな命令をして欲しい…。

コッ、コッ、コッ

妖しい空気の合間を縫うように、廊下から靴音が聞こえてきた。こっちに近づいて来る。ハッと目を見交わし、私は慌てて課長のデスクの下に潜り込んだ。

「黒瀬課長。残業ですか？」

営業部の氷神（ひかみ）課長の声だった。

「ええ、まあ。仕事が残ってまして」

こんな所に女性社員がいるのがバレたら、何をしてたか誤魔化しようがない。私は息を潜め、身を固くした。男性らしく足を広げて座る課長の中心は、テントを張って盛り上がった。いた。

「いくつかお尋ねしたいことがあります。時間外ですが、今よろしいですか？」

「…ええ、どうぞ」

コツ、コツ、コツ

経理部の入口から課長のデスクに向かって近づいて来る足音が響く。私は音を立てずに、スーツの上からペニスを優しく揉んだ。

「っ！」

びくっと下半身が揺れた。

「この間の、ミヤマ商事との商談時の経費の件なんです…黒瀬課長？どうかしました？」

「い、いや、何でもない。続けてくれ」

課長の右手が私の手を追っ払おうとしている。私は構わずペニスマッサージを続けた。課長の…かたくなってる。さっきのオナニーに興奮してたのは私だけじゃなかったんだ。嬉しい…。こんなに硬くなってるおちんちんを目の前で見せられて、おあずけなんて…。

氷神課長の話、すぐ終わるかなあ。カラダが疼いて…早くさっきの続きがしたい。

「こちらをご覧ください」

「ああ……」

氷神課長から書類を受け取るため、課長の右手がデスクの上に移動した。それをいいことに、私は細心の注意を払いながらスーツのホックを外し、音が鳴らないようにゆっくりと

チャックを下ろしていった。黒いボクサーパンツが不自然に盛り上がっている。男性器を目の当たりにして、子宮がきゅんきゅん疼く。口をすぼめ、パンツの上からあむつと食んだ。あったかい…。

課長の下半身がびくつと震えた。それでも構わずに、あむあむとペニスの形を確認し続ける。私の顔を遠ざけることができない課長は、平静を装って会話を続けていた。

カリの部分がすぐくでっぱってる気がする…。けど、布越しだとしてよく分かんないな。直接見ないと……。

「この書類のここの部分なんです、これは経費扱いになりますか？」

「ああ、こういうパターンは——」

ボクサーパンツのウエストゴムをグイッと伸ばして引き下げる。猛りきった課長のペニス勢いよく飛び出してきた。

これが、ずっと見たかった課長のおちんちん…。すごい…。

こんなの興奮するなって言う方が無理。

課長：他部署の人と話しながらおちんちん出してる…。リモート会議中の私と同じ。あの堅物で有名な課長が、仕事中に勃起させてるなんて…。

私のショーツは濡れに濡れていた。しゃがんでいる股に手を忍ばせる。課長の唾液が残

る指をずぶずぶとおまんこに埋め込んでいく。勃起ペニスを眺めながらのオナニーは、ぶるっと震えるほど最高だった。頭上の会話を聞きながら、さらにペニスを指でツンツンツとつついてみる。課長は時折言葉を詰まらせながらも懸命に話を続けていた。

すーっと鼻から息を吸い込む。

雄の匂いにする。エッチな匂い、たまらない…。あ…やっぱり課長のおちんちん、カリのところがすごくてっばってる…。これがおまんこのヒダをこすったら…。バック挿入でGスポットをゾリゾリイッて引っ搔いたら…。想像しただけで…。だめ…。

私はとうとう我慢できずに生のペニスを咥え込んだ。

「ううっ…！」

「黒瀬課長？どうしたんですか？」

龟头全体にじゅぷり、と唾液を垂らしマーキングした。中指でGスポットを弄りながら、カ리를丹念に舐め上げる。

デスクひとつ挟んだ上と下では、まるで別世界が広がっていた。

「ゴホン、い、いや、何でもない…。続けてくれ…」

「はあ……。あとこの物品購入なんです——」

音だけは立てないように気をつけていた。ただ、オナニーしている指も、カリを這う舌も、どちらも動きは加速していった。

課長、困らせてごめんなさい。おちんちんが美味しくて、舐めるのを止められないんです……。

バレたらどうしよう……。私も課長もクビになっちゃう……。そんなの絶対だめなのに、どうしてこんなに興奮しちゃうの……。リモート会議の時と一緒だ。見られるか見られないかギリギリの所でエッチするのって……最高。

「なるほど。わかりました。ありがとうございます」

「いや、構わないよ」

「残業中に引き止めてすみませんでした。それでは、失礼します」

コッ、コッ、コッ

氷神課長の靴音は遠ざかり、やがて聞こえなくなった。頭上からは長い溜息が聞こえてくる。私は性懲りもなくフェラチオを続けていた。

「柏木」

一段と低い声で名前を呼ばれた。

「ちゅぼ…はい」

「こちらへ来なさい」

ペニスをボクサーパンツにしまってからデスク下を出るか、そのままにして出るか迷った。結局そのままの状態をキープし、のそりと立ち上がった。

「どうやら柏木には、本格的に説教が必要なようだな」

課長はネクタイを緩め、シュルリと外した。

——ここまでご覧いただき、ありがとうございます。続きは本作品にて。